

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

古墳壁画にさわる：優しく、ゆっくり、洋々と

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-11-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 広瀬, 浩二郎 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4516

古墳壁画にさわる 優しく、ゆっくり、洋々と

国立民族学博物館准教授 広瀬浩二郎

「点字の展示」がめざましいもの

現在、国立民族学博物館（大阪府吹田市）で企画展「点字の考案者ルイ・ブライユ生誕二〇〇年記念 …点天展…」が開催されている。中一のとときに失明し、以来三〇年近く点字を使っている僕は、ブライユにあらためて感謝しつつ、点字の市民権拡大を願って本展を企画した。オープンから早くも五〇日余が経過したわけだが、この「点字の展示」は老若男女、幅広い来館者から好意的に評価されている。マスコミ関係の取材も多い。

来館者のアンケートをみると、点字の歴史や視覚障害者の文化を知ることができ勉強になったという感想が目立つ。新聞の紹介記事でも「点字」視覚障害者のための文字」の存在をたくさんの人々に伝える展覧会として本展が取り上げられるケースが大半である。企画担当者である僕は、アンケート結果や記事

の内容にとりあえず満足している。だが、じつは本展にはもう一つ別の狙いがある。それは「点字」さわる文字」を通じて触覚の可能性を実証すること。企画展会場入り口に掲げた挨拶文で、「視覚障害者用の文字」ではなく「さわる文字」としての点字の意義を僕なりに要約した。

今、あなたの心の中で一つの点から壮大な宇宙（天）が広がる！

わずか六個の点の組み合わせで日本語の仮名はもちろん、数字、アルファベット、さらには音符まで表せる点字。

文字は線で表現するという健常者（多数派）の論理にこだわらず、触覚による読み書きに適した文字として提案された点字。

少ない材料から多くを生み出すしたたかな創造力、常識にとらわれないしなやかな発想力を「点字力」と名づけよう。

点字の考案者ルイ・ブライユの生誕二〇〇年である本年、「点字力」の豊かさとおもしろさを民博から発信したい。

石創画による高松塚古墳壁画

それでは触覚の可能性（点から天へとつながる「点字力」）をアピールするために、どのような資料を用意したのか。企画展では「触覚芸術」という語を用いてバードカービング、継手アートなどを展示している。これら触覚芸術の中でもっともユニークなものが高松塚古墳壁画の石創画である。石の粒、セメント、顔料を混ぜ合わせたものを絵具として塗り込み、固まった後、表面を磨くと、石の質感を伴った絵ができていく。この石創画は、江田拳寛氏が確立した独自の絵画技法であり、石の美しさや力強さを特徴としている。石創画の技術を応用してレリーフのように盛り上がった絵を制作すれば、「さわれない

はずのものにさわる」ことができる。有名な絵画、歴史的建造物の写真など、石創画作品の候補はいくつかあったが、江田氏とも相談し、企画展のために高松塚古墳壁画のレリーフ制作を依頼することにした。奈良文化財研究所、関西大学博物館からデータを提供していただき、彩色壁画の迫力と美しさを石創画により復元するプロジェクトが始まった。

石創画は江田氏がほとんど一人で塗り込み、磨きを行うので、時間と体力が必要である。完成が危ぶまれた時期もあったが、企画展オーブンの前日までに天井復元図（三枚）、東側壁復元図（東男子群像、青龍・日輪、東女子群像）、西側壁復元図（西男子群像、白虎・月輪、西女子群像）、北壁復元図（玄武）の合計一〇枚の石創画が納品された。この場を借りて江田氏の尽力に敬意を表したい。

今回の石創画展示には三つの目的がある。まず第一に国宝である高松塚古墳壁画の魅力を来館者に伝えること。教科書などで高松塚古墳壁画の一部に接することはあるが、実物、あるいは原寸大の復元図を間近で見るとは少ない。民博の企画展が国宝の美と古代の神秘に出会う場になることを期待している。

第二の目的は視覚障害者対応である。制作に先立って江田氏と合意したのは、「教科書などを通じて名前がよく知っているが、実際

にどんなものなのか想像できない絵画」を石創画にして視覚障害者にさわってもらおうということだった。石はさわり心地もよく、耐久性に優れている。点字の企画展ということで見えない人々が両手を動かして石創画の展示物にさわると鑑賞スタイルは、他の博物館ではあまり見ることができない光景だろう。

「さわ」は「さわ」

第三の目的はユニバーサル・ミュージアム（だれもが楽しめる博物館）としての「さわ」展示」の追求である。資料の保存という観点から、従来のミュージアムは視覚による見学を大原則としてきた。繊細なアート作品は、触れることによる破損の恐れもある。しかし、そもそも博物館の収蔵品の大部分は人の手で作られている。彫刻の細工などは、さわって初めて納得できる手仕事の美といえよう。

今回の高松塚古墳壁画の展示をとおして、僕は資料の保存に配慮しつつ、触覚による鑑賞を楽しむ方法（さわるマナー「やゆよ」）を提唱している。優しく、さわる。作品への愛情をもって注意深く触察する。ゆつくり、さわる。一目瞭然の視覚と異なり、モノを触知する場合は時間がかかる。あせらず繰り返しさわることにより、手仕事の細部を理

解できるだろう。洋々とさわる。あたたかも水が満ちあふれ広がっていくように、創造力と想像力を発揮して触学する。

石創画による高松塚古墳壁画は、さわるマナーを確認・普及するための展示物として位置づけることができる。目が見える・見えなさに関係なく、すべての来館者が触覚の重要性を再認識することが僕の希望である。手で作られた芸術を手で味わう。優しく、ゆつくり、洋々と。来館者の触覚の交流から新たな触れ合いが生まれることを願っている。

もともと高松塚古墳壁画は被葬者を慰め、安らかな永遠の眠りを与えるために描かれた。それが一九七二年に発掘され、一大考古学ブームを巻き起こした。個人のために描かれた壁画は国宝に指定され、多数の人が見学できるようになった。さて二一世紀の今日、見る壁画からさわる壁画への新展開を被葬者はどのように感じているのだろうか。



東女子群像（東側壁像復元図）